

ペルーの児童書選書にかかわる調査報告書

2015 年 3 月

報告者：スペイン語翻訳者

星野 由美

1. はじめに

ペルーは、ラテンアメリカ諸国の中で最初に日本と国交を結んだ国である。1873 年、日本の明治維新政府はペルーと日秘和親貿易航海条約を仮締結し、その後 1899 年に 790 名の日本人が、南米への初の集団移民としてペルーへ渡った。現在、ペルーに暮らす日系人は約 8 万人以上と言われている。また、法務省「在留外国人統計（2014 年 6 月末）」によると、我が国に在留するペルー人の数は 48,263 人となっている。多文化共生と言われる昨今、在日外国人児童を対象にした読書支援、読書環境の充実が益々求められるだろう。今回、こうした背景を踏まえ、国際子ども図書館におけるペルー児童書の充実を切に願い、選書リストの作成に携わらせて頂いた。

2. 国際子ども図書館の所蔵資料の評価、所見

ペルーの児童書は約 230 冊所蔵されており、1990 年代の書籍が多い。出版社は学校教材を主に扱う老舗の児童書出版社ブルーニョ社（El Editorial Bruño）と、教材パンフレット等を扱うグループ企業の出版社ナバレッテ社（Editorial Navarrete）の作品が多い。書籍はアンデルセンなどの古典作品や、ペルーの神話や伝説などであった。

3. ペルーの児童書の魅力

スペインの児童文学研究者カルメン・ブラーボ・ビリャサンテ（Carmen Bravo - Villasante : 1918-1994）は、児童書友好スペイン協会の会報誌に寄稿した「イベロアメリカ児童文学」の中で、ペルーの児童文学の魅力について次のように記述している。「ペルーにとって、フォルクローレ（民間伝承）はそれだけとは言わないが、児童文学の源であり泉である。植民地時代の伝統の中で感化されたペルー文学が地方の風俗描写を描く豊かさに非常に優れているとするならば（リカルド・パルマの『ペルー伝説集』を思い出してほしい¹）、その所以は、研究者や民族学者たちがインディヘナの伝統背景をいくばくかひっかきまわす時に、インディヘナの豊かさが増すのだと想像すべきであろう。それはまるで黄金を採掘するようなものかもしれない。発掘調査の度に金属鉱山を発見するようなものだ。ペルーの素晴らしい黄金は、博物館でガラスケースに展示され私たちに驚きを与えるが、こうしたインカ時代の驚くべき財宝の驚異的な魔法は、伝説や物語の豊かな資源の

¹ 「リカルド・パルマ:Ricardo Palma (1833-1919):ペルーのロマン派の作家。1872 年から 1910 年にかけて断続的に発表した《ペルー伝説集》は、全 10 巻から成る大作であり、征服以前から植民期を経て共和政にいたるペルーの風俗、伝説、歴史的逸話などをロマン主義的な手法で綴って、ひとつのジャンルを創造した。彼はこの作品でペルーの伝説と伝統を提示することにより、ペルー人としての国家意識と国民性の自覚を促している。」神代 修、世界大百科事典、平凡社、2011 年改訂新版第 5 刷発行より引用

宝庫に相当する。」²

ペルーには数々の神話が尽きることなく存在すると言われている。日本人の常識では計り知れない大自然の雄大さは、アンデス山脈に見られる山岳地域、ジャングルの魅力あふれる熱帯雨林地域、そして海岸地域という多様な気候と地理的条件により生み出されたものだ。そして何より自然との共生を学ぶ姿勢こそが、子どもの教育的感性や世界観を広げる重要なテーマとなってきた。こうした自然の雄大さを背景に、ペルーの児童文学にはフォルクローレ（民間伝承）の物語が多く存在する。そして、物語に動物の存在は欠かせない。コンドル、アルパカ、ビクーニャ、ジャガー、クイ（天竺ネズミ）、ヘビ、キツネなどが、フォルクローレの物語によく登場している。

4. ペルーの児童文学における代表的作家及び画家

ペルーの作家兼文芸評論家ダニーロ・サンチェス・リオン（Danilo Sánchez Lihón: 1943-）は、児童文学雑誌『クレヨンと紙』の中で、ペルーの児童文学の礎を築いた作家について次のように述べている。「ペルーの児童文学の頂点とも言える人物を選ぶなら、誰もが認める作家にカルロタ・カルバージョ・ヌニェス（Carlota Carvallo de Nuñez: 1909-1980）とフランシスコ・イスキエルド・リオス（Francisco Izquierdo Ríos: 1910-1981）の二人が挙がるだろう。二人は友人同士でもあり、共に 20 世紀以降の児童文学界の発展に広く活躍した。」³

このように、ペルー児童文学の創始者ともいえる 2 名を筆頭に、その後 21 世紀に入り次々と児童文学作家等が活躍するようになった。例えばほんの一例であるが、2000 年、第 27 回 IBBY 世界大会（コロンビアのカルタヘナ・ディ・インディアスで開催）の開催時に、コロンビアの読書推進協会であるフンダレクトゥーラ（FUNDALECTURA）は、児童文学における IBBY ラテンアメリカ加盟国の発展状況を報告するために、ラテンアメリカの児童文学作家・画家カタログ『道をつくる...（Se hace camino...）』を出版した。このカタログで、ペルーの代表的な作家および画家として以下の人物たちの名前が紹介されている。作家としては、ロサ・セルナ（Rosa Cerna: 1926-2012）、オスカル・コルチャード（Óscar Colchado: 1947-）、ホルヘ・ディアス・エレラ（Jorge Díaz Herrera: 1941-）、ホルヘ・エスラバ（Jorge Eslava: 1953-）、エリベルト・テホ（Heriberto Tejo: 1951-）である。画家としては、ファン・アセベド（Juan Acevedo: 1949-）、コンスエロ・アマト・イ・レオン（Consuelo Amat y León: 1951-）、オスカル・パブロ・カスキーノ（Oscar Pablo Casquino: 1958-）、グレドゥナ・ランドルト（Gredna Landolt: 1951-）が紹介されている。

² Carmen Bravo-Villasante, 「La literatura infantil iberoamericana」, 『Boletín (Asociación Española de Amigos del Libro Infantil y Juvenil)』 Año X, núm. 19, enero-abril 1992
http://www.cervantesvirtual.com/obra-visor/boletin-asociacion-espanola-de-amigos-del-libro-infantil-y-juvenil--9/html/025d4036-82b2-11df-acc7-002185ce6064_16.html#I_10_

³ Danilo Sánchez Lihón, 「Urpicha Carlota Carvallo」, 『Crayolas y Papel』 junio, 2009
<http://www.crayolasypapel.com/2013/02/04/urpicha-carlota-carvallo/>

さらに、ペルーの民話や伝説の収集と研究に当たっている歴史研究者で作家でもあるマリア・ロストロスキー（María Rostworowski: 1915-）の存在も欠かせない。彼女はペルーの伝説や神話を集めた作品を、子ども向けに多く執筆している。

5. ペルーの児童文学の成長

2003 年から 2010 年の間に、ペルーの児童文学は急成長を遂げたと言ってよいだろう。2003 年は年間児童書出版数が 35 点だったのに対し、2004 年には 65 点が出版された。その間、傑出した作家としてあげられるのは、ロサ・マリア・ベドヤ（Rosa María Bedoya: 1962-）とホルヘ・エスラバ（Jorge Eslava）である。その後、2005 年には年間児童書出版数は 73 点にまで達した。その間の主な作品としてあげられるのは、オスカル・コルチャード（Óscar Colchado）作のチョリート少年が登場する冒険物語や、ホルヘ・エスラバ作の海賊キャプテン・センチージャが登場する様々な物語である。その後、児童書出版数は順調に増え続け、2007 年には 120 点に及んだ。⁴

ペルーにおいて、このように児童文学が数字上急成長を遂げた理由には、教育省による読書推進計画である「プラン・レクトール（Plan Lector）」によるところが大きい。イベロアメリカ市場の中で読書推進の経験豊富な国としては、アルゼンチン、メキシコ、コロンビア、スペインが挙げられる。これらの国は読書推進機関が充実し、国レベルだけでなく非営利団体などの民間団体の参加も積極的だ。一方、ペルーは上記の国々に比べると、出版市場の規模も小さく、読書推進もかなり遅れていた。

こうした状況の中、2006 年にペルー教育省の下でプラン・レクトールが提唱され、小学校の教師と児童を対象に学年ごとに 1 年に 12 冊の本を選定し、1 カ月に 1 冊の本を読み、読書への関心と向上を図るプロジェクトが開始された。このプロジェクトは 2021 年までの長期目標を設定しており、大人の読書数を増加させる、児童の読書への関心度を高める、図書館の充実を図る等について、それぞれ具体的な目標値を設定している。また、児童書出版部門アルファグアラ・インファンティル（Alfaguara Infantil）を持つサンティジャーナ社（Santillana）をはじめ、ブルーニョ社（Bruño）、サン・マルコス社（San Marcos）、ノルマ社（Norma）等の児童書出版社が、児童書の出版の充実を図るため各社プラン・レクトールのカタログを作り、物語の発掘やフィクションを中心としたジャンルの充実に力を入れている。さらに、イベントも盛んに実施されるようになった。例えば、リマの書店で作家自らが本のプロモーションを行う等、出版社を介した読者と作家の交流も盛んになっている。こうした努力の甲斐もあり児童書出版ブームが起これ、2011 年には児童書販売数は前年比 15 パーセントの成長を遂げた。⁵

しかしながら、ペルーで著名な教育者であり児童文学作家のホルヘ・エスラバは、国の

⁴ Carmen Rosa León y Carlos Maza, 「11. Un universo aún en ciernes, Actividad editorial en Perú」, 『Anuario sobre el libro infantil y juvenil 2009』 p166

⁵ 「Venta de literatura infantil crece 15% en Perú, informa Cámara Peruana del Libro」, 『Agencia ANDINA』 el 8 de octubre de 2011

読書推進計画であるプラン・レクトールは適正に機能していないと警鐘を鳴らしている。ホルヘ・エスラバによると、本を提案する教師たち自らが選定された本の評価をせず、その議論が行われていないという。つまり、教師等大人たちに読書習慣がないのだから、このプロジェクトの達成は難しいと言わざるを得ないと述べている。⁶

このように、ペルーは国を挙げて読書推進に力を入れようと本腰を挙げたところではあるが、プラン・レクトールを数字上だけで判断してはならず、まだ課題は多く残されている。

6. 近年のペルーにおける絵本出版の成長

1998 年、ペルーの現代作家アルフレド・ブライス・エチェニケ (Alfredo Bryce Echenique: 1939-) が子ども向けの絵本『ゴイグ (Goig)』をペイサ社 (PEISA) から出版し、1999 年に IBBY ベネズエラにより優良図書に選定された。この絵本の挿絵を担当したのは、ペルー日系人で現代芸術家のエドゥアルド・トケシ (Eduardo Tokeshi: 1960-) であった。この頃から、ペイサ社の絵本シリーズ「キルクインチョ・シリーズ (Serie de Quirquincho: アルマジロ・シリーズ)」は、刊行数を伸ばしはじめた。

その後 2006 年から、ペルーの現代詩人として高い評価のあったホセ・ワタナベ (José Watanabe: 1946-2007) が、子どもの絵本の執筆を手掛けるようになった。ホセ・ワタナベは、詩人としての活躍の他、映画や芝居の戯曲を執筆したり、子ども向けのテレビ番組のプロデューサーとしても活躍したりしていた。残念ながら 2007 年に癌で逝去したが、彼は亡くなる前に絵本の執筆に力を注ぎ、子どもが読んで楽しめる本作りを目指し 6 冊の絵本をペイサ社から出版した。特に、彼の遺作となった絵本『ちょっとかわったおかしいぬ (Un perro muy raro)』は、2012 年第 33 回 IBBY 世界大会 (ロンドンで開催) で紹介された IBBY ラテンアメリカ・カリブ諸国による児童書セレクションの報告書に掲載されている。⁷

ホセ・ワタナベの死後もその意志は受け継がれ、その後も 3 冊の絵本が出版されている。2009 年には、ホセ・ワタナベの妻で詩人のミカエラ・チリフ (Micaela Chirif: 1973-) が、ホセ・ワタナベとの共著の絵本『アントニオさんとアホウドリ (Don Antonio y el albatros)』を出版した。その後、彼女は絵本作家として活躍するようになり、現在までに 6 冊の絵本を出版している。また、ホセ・ワタナベの娘であるイッサ・ワタナベ (Issa Watanabe: 1980-) も、父親の死後出版された絵本『えにかいたとり (El pájaro pintado)』のイラストを担当し、その後も絵本画家として活躍している。こうした流れの中、2013 年には、ミカ

⁶ Jaime Cabrera Junco, 「Es demagógico decir que leer es un Placer」, 『Lee por Gusto』
<http://leeporgusto.com/jorge-eslava-es-demagogico-decir-que-leer-es-un-placer/>

⁷ 2011 年 10 月、キューバのハバナで開催された国際読書会議 (Congreso Internacional Lectura 2011) 開催中、アルゼンチン、ボリビア、ブラジル、コロンビア、キューバ、チリ、エクアドル、グアテマラ、メキシコ、ペルー、ウルグアイ、ベネズエラの IBBY ラテンアメリカ・カリブ諸国 12 カ国は、第 2 回ラテンアメリカ・カリブ会議を開催し、各国の友好を深めると同時にそれぞれの地域および世界へ向けて良質な本を紹介するためのネットワーク構築等に関する提案が行われた。その一環として、IBBY ラテンアメリカ・カリブ各国の児童書を紹介する報告書が作成され、2012 年、第 33 回 IBBY 世界大会 (ロンドン) の開催時に紹介された。

エラ・チリフ作、イッサ・ワタナベの絵による絵本『いいこにしないで、マストドン！（¡Más te vale, mastodonte!）』が、メキシコの FCE 社（El Fondo de Cultura Económica）主催の絵本コンクールである「風の岸辺賞（A la Orilla del Viento）」を受賞した。ラテンアメリカはもちろんのこと、国際的に権威あるこの賞の受賞は、ペルー国内でも大きな話題を呼んだ。

ペルーの絵本の傾向としては、ほんの数年前まで物語が中心の作品が多く、イラストはその補足的な意味合いのものでしかなかった。動きのある柔らかい線の絵が文字と同じように語り、読者もまた絵を読む力を求められるような絵本はあまり目にしてこなかった。しかしここ数年、良質な絵本が数多く出版されるようになってきている。

ペルーの絵本出版においては、スペイン系の大手出版社である SM 社やアルファグアラ社（Alfaguara 社）が児童書および絵本においては大きな市場を占めているが、ペルー資本であり老舗出版社でもあるペイサ社のキルキンチョ・シリーズは児童書において高い評価を得ている。また、2010 年に設立された新鋭出版社のポリフォニア社（Polifonía Editora）もペルー資本の絵本専門出版社で、フランクフルトやボローニャのブックフェアに参加するなど、国外も視野に入れた活動を展開している。2011 年、同出版社は新たな試みとして、リマ美術館の絵本コレクションの出版を請け負っている。このプロジェクトは、教育文化振興を目的とした BBVA コンチネンタル財団の後援の下、リマ美術館の展示作品をテーマにした絵本コレクション 8 冊を出版するというものである（2014 年現在で 4 冊が出版されている）。プロジェクトの第 1 作目の作品は、作家ミカエラ・チリフと画家ルイス・カステジャーノス（Luis Castellanos: 1973-）による『かるわざし（El Contorsionista）』であった。この作品はプレ・コロンビア期のクピスニケ文化の美しい土器である「軽業師（El Contorsionista）」にインスピレーションをかりたてられ創作へと至ったようだ。今後、ペルーの絵本はフォルクローレはもちろんだが、それ以上に既存の壁を打ち破るイマジネーション溢れる作品が多く出版されるのではないかと期待される。

7. 主な児童文学団体

主な児童文学団体は二つある。一つ目は、1980 年に設立されたペルーの読書推進機関である「児童文学情報資料センター CEDILI（Centro de Documentación e Información de Literatura Infantil）」である。この機関は、ベネズエラの読書推進機関バンコ・デ・リブロー（Banco de Libro）と米州諸国機構（Organization of American States）の主導の下に設立された。現在、CEDILI は IBBY ペルー代表の機関でもある。創業者であるリリー・カバジェーロ・デ・クエト（Lilly Caballero de Cueto: 1926-）は、30 年にわたりペルーの読書推進プロモーターとして活動を続けている。この機関の活動維持費は個人や組織からの寄付で成り立っており、主な活動は、図書館のない地域や地方に読書環境施設を設置したり、民話や神話を中心としたペルーに伝わる物語を CEDILI から出版し、読書推進に活用した

りしている。リリー・カバジェーロ・デ・クエトの功績は国際的にも認められ、リンド・グレン記念文学賞にも、その名はノミネートされている。

二つ目は、CEDILI の創設後の 1982 年に設立された「ペルー児童文学協会 APLIJ (Asociación Peruana de Literatura Infantil y Juvenil)」である。この協会には、著名な作家や児童文学研究者等がメンバーとして名を連ねている。

8. ペルーの児童文学賞

主な国内の児童文学賞は二つある。一つ目は SM 財団とペルー国立図書館主催の児童文学賞「バルコ・デ・バポール (Barco de Vapor : 蒸気船の意)」で、この賞は 2009 年以降毎年授与されている。二つめは北米ペルー文化機関 ICPNA (El Instituto Cultural Peruano Norteamericano) 主催の児童文学賞「ICPNA 児童書作品ビエンナーレ (Bienal de Cuento Infantil ICPNA)」で、2 年ごとに賞が授与されている。

絵本に関しては、2009 年、新人の絵本作家発掘を目的に、第 1 回絵本コンクール「カルロタ・カルバジョ・デ・ヌニェス賞 (Primer Concurso de Cuentos Ilustrados “Carlota Carvallo de Núñez”）」が設けられた。このコンクールは、IBBY ペルー代表でもある児童文学情報資料センター (CEDILI) とスペイン文化センター (El Centro Cultural de España) が共同主催、出版社サンティジャーナ・グループが後援となっており、審査員たちはペルーでも有名な作家、詩人、出版界の専門家たちで構成された。このコンクールで受賞に至ったのは、絵本『ブイナイマの夢 (El Sueño de Buinaima)』である。アマゾンのジャングルの奥に暮らすウイトト族に伝わる伝説や神話を、ウイトト族出身のアーティストであるレンベル・ヤワルカーニ (Rember Yahuarcani: 1985-) が手がけた作品だ。

9. ペルーの児童書を発行している出版社

児童書を出版している主な出版社は、スペイン系グループの SM 社やプラネタ社 (Planeta)、スペインのアルファグアラ社 (Alfaguara) 系列のサンティジャーナ社 (Santillana)、コロンビアを本社にラテンマーケットで活躍のグループ企業ノルマ社 (Norma)、ペルー老舗出版社のペイサ社 (PEISA)、民話や伝説に力を入れているサン・マルコス社 (San Marcos)、教育教材等を扱うブルーニョ社 (Bruño)、新鋭の出版社のボラドール社 (Borrador)、グラフ・エデシオネス社 (Graph Ediciones)、メサ・レドンダ社 (Mesa Redonda)、ポリフォニア社 (Polifonía Editora) 等である。2011-2012 年での児童書の出版点数の多い出版社は、1 位 サン・マルコス社、2 位 サンティジャーナ社、3 位 プラネタ社、4 位 SM 社、5 位 ノルマ社である。⁸

⁸ Alberto Thieroldt, 「13. Con pocos espacios para su discusión como corpus」, 『Anuario iberoamericano sobre el libro infantil y juvenil 2013』p209

10. ペルー国内のブックフェア

ペルーは、他のラテンアメリカ諸国（アルゼンチン、メキシコ、チリ等）のように、児童書を推進するブックフェアは未だ開催されていない。現在のところ、国内で一番大規模な国際ブックフェアは、ペルー図書館会議所（Cámara Peruana del Libro）主催で毎年 7 月に開催される「リマ国際ブックフェア」と毎年 11 月頃に開催される「リカルド・パルマ・ブックフェア」である。リマ国際ブックフェアは、ラテンアメリカを中心としたおよそ 20 カ国の参加国による国内外の書籍を展示販売するフェアで、来場者は 2012 年 265,000 人という数字が挙げられている。同じくリマで開催される秋のブックフェア、「リカルド・パルマ・ブックフェア」は同年 170,000 人であった。これらのブックフェアでペルーの児童書の売れ行きは、全体の 35 パーセントということである。⁹

ブックフェアはリマ以外にも、トゥルヒージョ、ワンカーヨ、アレキーパなどの県でも開催されている。地方で活動する作家やアーティストは、こうした地方でのブックフェアが出版社、批評家、プレス、作家等との貴重な交流の機会となっているという。今後、首都リマを拠点とする書籍団体がいかに地方との連携を図っていくのかが、新たな作品や作家の発掘への大きなカギとなるのかもしれない。

11. 今回の報告書およびリスト作成

以上のように、ペルーの児童文学の特徴が「フォルクローレ」であることを踏まえつつ、著名な作家のロングセラー作品やコンクール等の受賞作品を中心に選書リストを作成した。作家の選定については、SM 財団が実施している『児童文学に関するイベロアメリカ年次報告』の「ペルーの児童文学」が、2009 年以降に掲載されるようになったため、それを参考にした。また、サンティジャーナ社、サン・マルコス社、SM 社、ブルーニョ社の 2014 年プラン・レクトール向けの出版カタログも参考にした。なお、絵本の選定に当たっては、SM 財団の報告書のような参考資料が見あたらなかったため、ペルー教育省発行のカタログや新聞等からの情報を中心に最近の動向を探った。

また、選書リストにある各書籍の出版年、ISBN コード、シリーズ名については、ペルー国立図書館のオンライン蔵書目録を基礎データとし、書籍がより入手しやすくするため、最新版の出版年を優先した。

さらに、ペルーの絵本作家であり詩人でもあるミカエラ・チリフ（Micaela Chirif）女史には、ペルーの児童書をご推薦頂き、また、IBBY ペルー代表機関である児童文学情報資料センター（CEDILI）のご担当者を紹介頂く等、リスト作成に多大なるご協力を頂いた。この場を借りて心より感謝したい。

⁹ Alberto Thieroldt, 「12. Bajo una lectura predominantemente formativa」, 『Anuario iberoamericano sobre el libro infantil y juvenil 2012』p203

参考資料

カルメン・ブラーボ・ビリャサンテ（Carmen Bravo-Villasante: 1918–1994, Madrid）、児童文学のスペイン人第一人研究者、言語学者、民族学者、翻訳家、「イベロアメリカの児童文学（La literatura infantil iberoamericana）」、『児童書友好スペイン協会の会報誌 19 号 1992 年 1-4 月（Boletín (Asociación Española de Amigos del Libro Infantil y Juvenil) Año X, núm. 19, enero-abril 1992) 』

http://www.cervantesvirtual.com/obra-visor/boletin-asociacion-espanola-de-amigos-del-libro-infantil-y-juvenil--9/html/025d4036-82b2-11df-acc7-002185ce6064_16.html#I_10_

カルメン・ロサ・レオン、カルロス・マサ（Carmen Rosa León y Carlos Maza）、「11. 世界は始まったばかり、ペルーの出版活動（11. Un universo aún en ciernes, Actividad editorial en Perú）」、『2009 年児童文学に関する年間報告（Anuario sobre el libro infantil y juvenil 2009）』 p163-173

カルロス・マサ、マリア・ガルシア・モラレス（Carlos Maza y María Gracia Morales）、「13. 進展の年、ペルーの出版活動（13. Un año de avances, Actividad editorial en Perú）」、『2010 年児童文学に関する年間報告（Anuario sobre el libro infantil y juvenil 2010）』 p147-152

アルベルト・ディエロルド（Alberto Thieroldt）、「12. 形式的優位性の読書計画の下で（12. Bajo una lectura predominantemente formativa）」、『2012 年児童文学に関するイベロアメリカ年間報告（Anuario iberoamericano sobre el libro infantil y juvenil 2012）』 p195-p204

アルベルト・ディエロルド（Alberto Thieroldt）、「13. 論議する場はごく僅か（13. Con pocos espacios para su discusión como corpus）」、『2013 年児童文学に関するイベロアメリカ年間報告（Anuario iberoamericano sobre el libro infantil y juvenil 2013）』 p205-p219

『ペルー教育省一般基礎教育のための教育教材カタログ（Catálogo de recursos y materiales educativos de Educación Básica Regular）』 2011 年

『ペルー教育省一般基礎教育のための教育教材カタログ（Catálogo de recursos y materiales educativos de Educación Básica Regular）』 2012 年

「プラン・レク トールカタログ 2014（Plan Lector 2014）」 Santillana 社
<http://www.colgadodelalectura.com/pdf/280912110040.pdf>

新聞

「ペルーにおける児童文学の成長（Perú crece la literatura infantil y juvenil）」、ペルー大手日刊紙『エ

ル・コメルシオ (EL Comercio)』 2010 年 6 月 4 日掲載

「今、彼らはあなたより多く本を読んでいる (Ahora ellos leen más que tú)」、ペルー大手日刊紙『ラ・レプブリカ (La República)』 2009 年 9 月 6 日掲載

「ペルーでは児童書関販売数は 15 パーセント成長 —ペルー書籍協会の報告— (Venta de literatura infantil crece 15% en Perú, informa Cámara Peruana del Libro)」、『アンディーナ・エージェンシー (Agencia ANDINA)』 2011 年 10 月 8 日掲載

文学情報ウェブサイト

ハイメ・ガブレラ・フンコ (Jaime Cabrera Junco)、プラン・レクトールに関するホルヘ・エスラバへのインタビュー「読書が喜びだと言うのは扇動だ (Es demagógico decir que leer es un Placer)」、文芸情報サイト『読書を喜んで (Lee por Gusto)』

<http://leeporgusto.com/jorge-eslava-es-demagogico-decir-que-leer-es-un-placer/>